

増生が目立ち、3, 5週目には形質細胞増生が認められた。脾臓は著明な骨髓化生像を示した。ALS投与群ではリンパ節に小壊死巣が、ATS投与群では胸腺に小壊死巣が散在して認められ、胸腺に対してはALSよりATS投与の方が変化はより著明であったがリンパ節ではそれほど大きな差異は認められなかった。

23. 私の試みたカルテの整理法

○上野恭一（上野外科医院）

索引簿から当院はアが何名、イが何名、ウが何名……と全部調べ、それをほぼ十等分して、(1)アイ、(2)ウエオ、(3)カキ、(4)クケコサ、(5)シスセソ、(6)タチツ、(7)テトナニヌネノ、(8)ハヒフヘホ、(9)マミムメ、(0)モヤユヨラリルレロワンと対応させた。そして姓からも名からも上の2つをとって姓名を四桁の数で表現した。たとえばウエノキヨイチは2230である。

この方法によれば、カルテナンバーは改姓改名以外は不变である。したがって索引簿や受付簿は全く不要となる。またカルテは常に十等分に整理される。

24. Post-operative Intrahepatic Cholestasis

○水口公信、松山迪也、綿引義博
(国立がんセンター)

国立がんセンターにおいて、4例（食道癌2例、胃癌2例）の術後黄疸と組織学的に post-operative intrahepatic cholestasisと考えられる症例に遭遇したので報告する。

術前のRiskは良好、術前肝機能正常。術後3～5日目黄疸出現し、全身状態良好、黄疸指数45～80×、尿ウロビリノーゲン強陽性、Transaminase値軽度増加のみである。麻酔、手術は経過良好である。麻酔方法はフローセン3例、ペントレン1例である。術後1例は尿毒症、1例は腹膜炎のため死亡した。病理組織は肝汁色素のうつ滞、肝細胞索の乱れ、膨化を認めるが、肝細胞壊死や炎症は認められない。

本症は諸外国に多くの報告をみるが、一過性肝分泌不全によりSteroid Ikterusに類似した病理組織を有するが、詳細はメカニズムについては不明な点が多い。

25. Intensive Care Unitにおける呼吸管理

瀬戸屋健三、吉岡宏三
(千葉労災病院)

全身麻酔終了後覚醒まで収容するリカバリールームの形式を廃して、ひろく手術後数日間にわたって重症患者を収容したり、呼吸循環系に失調のある外傷や、内科的

重症患者をも収容して、集中的な監視と治療を行なう目的で、Intensive Care Unit (I.C.U.) を11床開設して、2年6ヶ月間に総計906例を収容治療した。

麻酔科医によって、術中術後を通じて一貫した方針で輸液と呼吸循環系の庇護が行なわれルーチンなNebulizationの結果、定時手術患者の術後呼吸管理には満足すべき結果がえられた。工業ガス中毒に起因する両側肺炎の内科患者、クレゾール中毒による急性肺水腫の皮膚科患者の2例は、気管切開と適切なRespiratory Therapyによって救命した。呼吸管理のもっとも困難であった頸髄損傷で椎体固定術の行なわれた5症例について、気管切開後の呼吸管理、無気肺の治療におけるI.P.P.B., Nebulizationの効用をX線フィルムのスライドで供覧した。

26. 千葉県立鶴舞病院における心臓手術の現況

○松岡淳夫、岡村 宏、相楽恒俊、
中村常太郎、瀬崎登志彰、山下淳平
中村誠一郎 (県立鶴舞病院)

鶴舞病院における心血管手術症例数は142例であるが、うち開心症例は127例(TF 38, ASD 16, ASD+PS 4, VSD 46, VSD+PS 3, PS 7, MS 5, MI 7.)であり、いずれも単純超低温法により根治手術を行なった。治癒率は87.3%で、16例を失なったにすぎない。特にTFは38例中32例が治癒している。この半数の19例は5才未満であるが1例を失なったのみである。

Blalock手術のshuntの効果は少なく、根治手術の段階で癒着による出血の増大があり、また心機能の改善が少ないので、むしろ早期根治手術を施行すべきである。術後の経過も年長児より5才未満の方が良好で安定しているものが多い。このように良好な成績の原因は、①長時間の血流遮断が可能で無血静止野がえられる、②出血量が少なく、輸血も少量ですむ、③代謝の低下により個体に対する侵襲がきわめて少なく、術後人工冬眠へ移行しその管理が容易である、などの多くの利点をもつ単純超低温法を用いた開心術と術後人工冬眠のもと適切な呼吸管理を行なっていることにある。

今後さらに本法を用いて症例を重ねたい。

27. 当院における頭部外傷例

○藤山嘉信、小幡五郎、伯野中彦
平形 征、青木宣昭 (松戸市立病院)

松戸市立病院における最近約1年間の重症頭部外傷例のうち、興味ある7例につき報告する。報告例は、脳挫傷2例、脳挫傷+頭蓋内血腫4例、脳挫傷+硬膜下水腫